〔觀古雜帖〕百萬塔幷塔中所納陀羅尼

小卷無軸、紙高各一寸八九分、但天平尺也、天平尺ハ今ノ曲尺ヨリ十寸ニシテ二分短シ、次下分寸ヲ云モノ皆用之、

〔續日本紀二十稱德〕寶龜元年四月戊午、初天皇八年亂平、乃發弘願、令造三重小塔一百萬基、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤之下、各置根本慈心相輪六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺、

〔地方新書〕法隆寺の百萬塔のこと、○中略余嘉永辛亥九月、色川氏をとひ、同氏家藏の百萬塔をはかり見しに、今の曲尺と符合せり、さるを觀古雜帖に、天平尺は曲尺より二分を短くすと云るは、失考なるべし、

〔律尺考驗〕御府ノ竹周尺、○中略往歲余コレヲ小倉藤亞相實起卿ニ聞ケリ、古來禁裏ノ御文庫ニ、竹ノ周尺アリ、弘法大師、入唐ノ時、彼方ヨリ佩テ歸リタル尺ト云傳ヘタリ、竹ニテ作リ、ウラニ周尺ト刻メリ、形色甚ダフルビテ、誠ニ千載ノ物トミユ、一トセ勅ヲウケテ、文庫ノ書ヲ晒シケル時ニコレヲ見テ、則謹テ委シク摹シトメタリ、其後寛文元年、內裏燒タル時、モトノ尺ハウセタリト、余ソノ摹尺ヲ亞相ニ請ヒ、ウツシ取テ、漢唐ノ錢ヲ以テハカリシニ、此尺卽唐ノ准尺ニ合タリ、則此尺、梁ノ表尺ナリ、此尺ヲ一尺二分一四餘ニワリテ、其一尺ヲ以テ、古周尺ト定ム、晉前尺とするなり後周鐵尺、比晉前尺、一尺六分四釐トアリ、唐小尺、卽此尺ト同ジキ故ニ、考定ノ古尺ノ一尺六分四釐ヲ以テ、唐ノ小尺ヲ定メ、小尺ノ一尺二寸ヲ以テ、唐ノ大尺ヲ定ム、大尺ハ古尺ノ一尺二寸七分六釐八毫ニ比シ、古尺ハ大尺ノ七寸八分三釐二毫ニ比ス、又此古尺ヲ以テ、何レソ證跡ニクラベテモ、皆合ズト云コトナシ、然レバ、此尺ノ梁ノ表尺ニ出テ、唐ノ准尺タルコトハ、其疑ナキモノ歟、是ヲ周尺ト云ツタヘタルハ、凡古代ノ尺ヲ、佛氏ハ皆周尺ト稱スルガ故ナリ、

〔槐記〕享保九年五月九日、三器通考拜借ス、尤秘スベキ由仰ラル、ソレニ付兼テ仰ラルヽ通リ、日本